

2020年11月13日

イギリス・ロマン派学会会員各位

2020年度冬季談話会のお知らせ

拝啓 時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、来る12月26日に冬季談話会を開催いたしますので、ご案内いたします。この度の談話会は、オンラインで開催いたします。参加のためのアクセス情報は、開催の1週間ほど前に、参加希望者にメールでお送りいたします。参加を希望される方は12月19日までに以下のURL

<https://forms.gle/oWmgyV7RpYV4tTeKA>

からお申し込みください。

なお今回はオンライン開催のため、案内をお送りする対象を、これまでのように関東近辺に限定せず、イギリス・ロマン派学会会員全員にお送りしております。皆様どうぞ奮ってご参加ください。

日時：2020年12月26日 16時～18時頃

場所：オンライン

発表：山田崇人氏（成蹊大学）

タイトル：ワーズワス“Yew-Trees”再び

ー 調べるほどに読みは深まったか

司会：小林英美氏（茨城大学）

(発表要旨)

“Yew-Trees” は、imagination の詩としてコウルリッジもワーズワス自身も高く評価していたが、読むように勧められた Henry Crabb Robinson の反応は「いい詩だけど、どこが優れているのかというとさっぱりわからない (かなり意識)」というものだった、というのは多くの研究者が指摘するところである。コウルリッジもワーズワスの想像力を最もよく表す例として『文学的自叙伝』にこの詩を引用しているが、それ以上は何も述べていない。Lorton と Borrowdale のイチイの木の独特な描写と、あまり馴染みのない人名・地名、そして後半の擬人化された character のためにやや取り付きにくいこの詩は、イチイの木を研究した *The Yew-Trees of Great Britain and Ireland* (1897) において Wordsworth’s celebrated poem と言及されるなど、比較的よく知られた詩だったにもかかわらず、内容について詳しく論じられるのは、Brooks and Warren の *Understanding Poetry* 第3版 (1960) を待たなければならなかった。そこに示された一つの解釈によってこの詩の意味はかなり明らかになった。そして 1973 年に Brooks と Warren の解釈と詩の読み方に異を唱えて、詩の背景知識を必要以上に論じても詩の解釈には役に立たないと論じた Riffaterre の論文が発表されると、その2年後の 1975 年にはその Riffaterre の分析法に反論した Hartman の論文が出て、それ以来さまざまな角度から論じられるようになった。また最近はいちいの

木自体の研究書も増えてきて、イチイの木の生態や歴史・文化における役割も明らかにされているが、そこでもこの詩はよく引用されている。これらの研究によって、馴染みのなかった人名・地名やさまざまなイメージについて、多くの情報が得られたが、それによってこの詩に対する理解がどれくらい深まったのかということについて考えてみたい。

以上

イギリス・ロマン派学会事務局

